梅花女子大学文化表現学部紀要, 15:71-80

「臥す」の文学史―源氏物語以前―

中川　正美

一　はじめに

「寝」「臥す」「大殿籠る」は、元来は眠りに関わる語であるが、平安文学では男女の関わりをいう表現としても用いられている。これらを私たちは拡大解釈し類推して、一様に男女が契りを結ぶ表現と解してきた。しかし、語が異なる以上、語義は異なる。語義からすれば「寝」は眠るという行為を、「臥す」は横になる動作を、「大殿籠る」の「籠る」は動作を表すが、「大殿」は宮殿や立派な邸宅の意で古くは寝殿に籠り休息する意の尊敬表現だから、むしろ状態を表していよう。これら三語は平安貴族の日常を綴ると同時に、恋愛や夫婦生活における男女の関わりを描いていく。では、この三語はどのように使い分けられているのか、それを、まず、「臥す」から考えていきたい。

というのは、男女の情交の意としては、「寝」は和歌には比較的認められるが、地の文にはほとんど認められない。逆に、「臥す」は和歌では散見する程度で、地の文には比較的よく認められる。「大殿籠る」（「殿籠る」を含める）は散文にしか用いられないが、散文の「寝」とはちがって情交を表す表現としても用いられている。〈注1〉こうした、語によって相反した現象が浮かび上がるのはまことに興味深い。散文での「臥す」表現が、作品の特性を浮かび上がらせてくると思われるからである。

二　「臥す」と「伏す」

「臥す」表現を考える前に、「伏す」との相違を見ておこう。辞書や索引では「伏す」と「臥す」が一括して説明されることが多い。万葉集の用字では「臥」「伏」が共に認められるが、語義に即して使い分けているかに見えて、必ずしもそうとはいえない。平安仮名文の注釈書でも、本文に当てている漢字と、注や現代語での訳出が異なっている場合もよく見受けられる。「伏す」と「臥す」の相違が那辺にあるのか、それがよくわかるのは、動物や植物に用いられた場合である。

①かけまくも　ゆゆしきかも　…あかねさす　日のことごと　ししじもの（鹿自物）　い這ひふしつつ（伊浪比伏管）　…

（万葉集・一・一九九・人麻呂）

②秋萩をしがらみ伏せて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ

（古今集・秋・二七）

①②は「伏す」で、①の高市皇子の挽歌では舎人が喪服を着て悲嘆するさまを「ししじもの（鹿自物）」、獣でもないのに「い這ひ伏し」、這いつくばってと詠んで、鹿や猪が頭を下げて身を低くする動作に喩えている。仮名書きの「犬じもの　道に伏してや（伊奴時母能道尓布斯弖夜）」（八八六）でも、犬が足を踏ん張って体を倒し、頭を低くする動作に喩え、枕詞の「天雲の向伏す」も雲が下方に低く垂れている状態を表している。平安和歌でも②のように、これは下二段だが、鹿が萩を脚にからませ倒す動作で萩が倒されて低くなるさまをいっている。

それに対して、「臥す」は魚に用いられている。

③沖辺行き辺に行き今や妹がため我が漁れる藻臥束鮒

（万葉集・四・六二五・高安王）

④賀茂川の瀬に臥す鮎のいをとりて寝でこそ明かせ夢に見えつや

（大和物語・七〇・三〇〇）

⑤ありとても幾世かは経る唐国の虎ふす野辺に身をも投げてむ

（拾遺集・雑恋・一二二七・国用）

⑥大きなる木の風に吹き倒されて、根をささげて横たはれ臥せる。

（枕草子・無徳なるもの・二三一）

③は高安王が女性に鮒を贈る歌で、岩波文庫（二〇一三年一月）では「藻に隠れている一束の（握りこぶし）ほどの長さの鮒」と注し、新編日本古典文学全集では「苞の中に藻とともに詰めて生きたまま届けられた小鮒をいうか」と注しているが、包まれて横になっている姿をいうのだろう。④も賀茂川堤に住む監の命婦が忠文の息子に鮎を獲って贈り、浅瀬を床として横たわる鮎の漁をして、眠らずに夜を明かした私の姿が夢に見えたでしょうかと恋情を訴えた歌で、鮎は横たわる体、⑤では既に夫がいる女に本気で懸想した男が、つらいのでいっそ身を投げたいと訴えているが、この「ふす」は釈迦の前世の故事、捨身諮虎を用いているから、犬や鹿のように頭を下げて姿勢を低くするのではなく、飢えて横たわるさまをいうのだから、「臥す」であろう。⑥では大木が風に吹き倒され「横たはれ」た、その横倒しの状態を「臥す」といっている。つまり、「臥す」は横長の状態で倒れているさまやその動作を表し、一方の「伏す」は頭部を下げ姿勢を低くするさまや動作を表す語なのである。

人間でもそれは同じである。

⑦ひさかたの　天の原より　…ししじもの（十六自物）　膝折り伏して（膝折伏）　たわや女の　襲取り懸け…（万葉・三七九・大伴坂上郎女）

⑧挿せども老いも隠れぬこの春ぞ花の面は伏せつべらなる

（後撰集・春下九六・躬恒）

⑦は天平五年一一月に大伴氏の氏神を祀る時にとりあえず作った歌で、恋の成就を鹿でもないのに膝を「折伏」せて祈願すると詠んでおり、⑧は躬恒が延喜の御代に召し上げられて挿しを賜ったときの歌で、花を挿しても老醜をさらすだけなのですから花も面目なげに顔を伏せてしまうしだい、邪気を払うどころか老いも隠せませんと「面伏せ」を用いてへりくだり、喜びを奏する歌である。

⑨むし衾なごやが下に臥せれども（雖臥）妹とし寝ねば肌し寒しも

（万葉集・五二四・藤原麻呂）

⑩天地の　初めの時ゆ…玉藻なす（玉藻成）　靡き許伊臥（靡許伊臥）　行く水の　留めかねつと…

（万葉集・二〇・四二一四・家持）

⑪…蛾羽の　衣だに着ずに　鯨魚取り　海の浜辺に　うらもなく　臥したる（所宿）人は　母父に　愛子にかあらむ　若草の　妻かありけむ…

（万葉集・一三・三三三六）

⑨は藤原麻呂が大伴坂上郎女に、カラムシの柔らかな夜具の下で臥しているが、あなたと共寝していないので膚寒くてしかたがないと独り寝の寂しさを触感で訴えており、⑩の家持が婿の母の死を弔問する挽歌では、病臥のさまを「玉藻なす（玉藻成）　靡き許伊臥（靡許伊臥）」と玉藻が靡くさまに喩えており、⑪は行路死人を無心に横たわっていると哀悼している。いずれも寝に就いたり、病臥したり浜辺に横たわっているさまを「臥す」といっている。「こゆ」は複合語でしか認められないが、転げ回って哀しみを表す「こいまろぶ」、展転反側して思い悩む「こいふす」も体を横たえる動作である。このように、「臥す」は動物にしろ大木にしろ人間にしろ、「伏す」が頭を低くする姿勢、いわば下方への移動をいうのとは違って、大地に立つものが横長に倒れているさま、またその動作をいっている。「うつぶし臥す」が平中物語や落窪物語源氏物語に認められるから、「臥す」自体に下向きに横になるという意はない。ここで取りあげる平安仮名文の「臥す」はこの基準に従って判断したもので、必ずしも、底本そのままではない。

三　平安仮名文の「臥す」概観

では、平安仮名文の「臥す」はどのように認められるのだろうか。

①現には臥せど寝られず起きかへり昨日の夢をいつか忘れむ

（後撰集・恋五・九二五）

②恋しきを慰めかねて菅原や伏見に来ても寝られざりけり

（拾遺集・恋五・九三八・重之）

③　埋火のいきてうれしと思ふには我がふところに抱きてぞ寝る

（落窪物語・二・一五三）

とて、かき抱きて臥したまひぬ。

「臥す」は、①で「臥せど寝られず」②で「臥し…寝る」と詠んでいるように、「寝る」ために身体を横たえる動作で、情交そのものをいうのではない。いずれも「臥し」て眠りに就く体勢を整えても眠れないと詠んでいるのだが、①は昨夜の夢のような密会を忘れるなんてとてもできないと後朝の興奮と余韻を謳い上げる喜びの歌、逆に②は「臥し」を連想させる伏見の地に来てもその名に反して何のかいもないと恋の苦悩を訴える歌である。このように、和歌の「臥す」表現は、「臥す」動作をしても眠れないことを前提として、さまざまな方向に展開させていく。

また、③は男君が無事女君を救出して据え、喜びと満足のうちに共寝する場面だが、和歌では「抱きてぞ寝る」、散文では「かき抱きて臥しぬ」と、同じく「抱く」に続けながら、和歌には「寝」、散文には「臥す」が用いられている。「寝」については別稿で詳述するが、一で、仮名作品では共寝の「寝」はもっぱら和歌に認められ、散文部分にはほとんど認められないと述べたが、ここにもその使い分けが現れていよう。

さて、こうした「臥す」が、平安仮名文でどのように認められるのか概観しよう。「臥す」には四段活用と、「宮の御方に臥せたてまつりたまひつ。」（うつほ物語蔵開上三四七）のような下二段活用があるが、ここでは、四段活用の「臥す」と「入り臥す」「臥し沈む」などの複合語を取り上げ、それらが平安仮名作品にどのように認められるか調査し、その総数と、そのうち男女の情交と考えられる数を括弧の内に示した。

古今集四（〇）　後撰集六（〇）　拾遺集八（一）

竹取物語四（〇）　伊勢物語四（〇）　大和物語七（三）　平中物語一（〇）　蜻蛉日記一七（一）　落窪物語九三（三七）　うつほ物語九四（二五）　枕草子二六（五）　和泉式部日記一〇（二）　源氏物語二一三（〇）　紫式部日記五（〇）

こうしてみると、「臥す」語彙は三代集にはほとんど認められないし、情交の意は拾遺集の一例にすぎない。その傾向は作中和歌も同じで、八〇頁の表で知られるように、「臥す」自体、和歌にはさして用いられていない。散文でも竹取物語や歌物語の初期物語にはほとんど認められず、蜻蛉日記で一七例認められるのだが、作品の長さを鑑みて比較すると、短すぎて比較しにくい初期物語や和泉式部日記・紫式部日記はさておき、落窪物語で突出して多用されており、総数は異なるが、うつほ物語と源氏物語は相似た使用状況といえる。ところが、男女の情交と考えられる「臥す」、以後「共臥し」と呼ぶことにするが、「共臥し」という観点から見れば、中期物語の落窪物語やうつほ物語ではぐんと多用されるようになっているのに、源氏物語では一例も見出せない。情交は若干だが、「大殿籠る」で示されている。とはいえ、「臥す」で男女の関わりを語っていないわけではない。作品の長さに比しての使用比率が似ていると いっても、作品個々の表現のありようは異なっていると考えられよう。

四　初期物語

竹取物語と歌物語の初期物語では、「臥す」はつぎのように用いられている。

①大納言、南海の浜に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、息づき

臥したまへり。舟にあるをのこども、国に告げたれども、国の司まうでとぶらふにも、え起き上がりたまはで、船底に臥したまへり。

（竹取物語・四七）

②立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きてあばらなる板敷に、月のかたぶくまで臥せりて、去年を思ひ出でてよめる。

（伊勢物語・四・一一六）

③昔、男、身は賤しくて、いと二なき人を思ひかけたりけり。すこし頼みぬべきさまにやありけむ、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひわびて詠める。

（伊勢物語・九三・一九五）

④それを兵衛の督の君、あや君と聞こえける時、曹司にしばしばおはしけり。おはし絶えにければ、常夏の枯れたるにつけて、かくなむ、

かりそめに君がふし見し常夏のねもかれにしをいかで咲きけむ

（大和物語・一〇八・三三四）

⑤大和の国なりける人の娘、いと清らにてありけるを、京より来たりける男の垣間見て見けるに、いとをかしげなりければ、盗みてかき抱きて馬にうち乗せて逃げていにけり。…日暮れて、龍田山に宿りぬ。草の中にあふりを解き敷きて、女を抱きて臥せり。

（大和物語・一五四・三八八）

⑥平中、そのあひけるつとめて、人おこせむと思ひけるに、司のかみ、にはかにものへいますとて寄りいまして、寄り臥したりけるを、追ひ起こして、「今まで寝たりける」とて、逍遙しに遠き所へ率ていまして、

（大和物語・一〇三・三二六）

①の竹取物語は、大伴御行大納言が、龍の首の珠を取ろうと築紫に漕ぎ出し、逆に龍に疾風を吹きかけられ、二度としないと誓言して、明石の浜に打ち上げられた時の状態で、南海の浜と思った大納言は息づかいも荒く横たわり、起き上がれずに船底に横たわったままだという。この二例の「臥す」は病臥を表し、燕の子安貝を捕ろうとして落ちた石上中納言も白目をむいて「臥す」、横たわっており、かぐや姫に昇天されてしまった翁媼も不死の薬も飲まず「病み臥せり」と、四例すべてが病臥の意で用いられている。

②の伊勢物語では深く愛していた女を失った男が、翌年の正月、女と共に過ごした思い出の対に赴き、あの折とは違って几帳や敷物などの調度が取り払われてがらんとしている板敷きに横になって、あの日、あの時のことを思い出しながら過ごしたという。これは横たわったまま、もの思いにふける「臥す」である。平中物語三段の長歌も「臥す床の　涙の川と　なりぬれば」と、床に横たわって恋のもの思いにふける「臥す」が認められる。

そして、③では「臥す」と対義の「起く」を用いて、「臥して思ひ」「起きて思ひ」と四六時中、いつも恋い慕うお方のことを思い続けるという。これは「起き臥し誰を恋ひつらむ」（大和物語四六段）というように、常時の意で用いる「臥す」である。

この大和物語になって、共臥しが和歌にも地の文にも認められる。④は藤原師尹が宗于の娘に通っていたが、途絶えてしまったので、女が枯れた常夏に付けて、「かりそめに君が臥し見し床」と詠み贈って、かりそめの共臥しでしたのねと訴えており、⑤では大和の娘を都から来た男が盗み出して、龍田山で女を抱いて共臥しをしている。④⑤では「床」「抱きて」を用いることで共臥しを示しているのである。

⑥は平中が武蔵守の娘と契った翌朝、ものに寄りかかって眠っていたところ、長官に起こされて逍遙に伴われ、次々と職務が重なって女の許に行けなくなり、帰った時には女は出家してしまっていたというのだが、この「寄り臥す」は就寝の意である。

このように、初期物語の段階で既に、「臥す」の用法、a病臥・b就

寝・cもの思い・d常時のすべての用法が認められる。ただ、これらの「臥す」が初期作品を性格づけているかというと、そこまではいえない。

五　蜻蛉日記

蜻蛉日記には「臥しながら」が三例認められる。

①前栽の花いろいろに咲き乱れたるを見やりて、臥しながらかくぞ言はる。かたみに怨むるさまのことどもあるべし。

　ももくさに乱れて見ゆる花の色はただ白露のおくにやあるらむ

とうち言ひたれば、かく言ふ。

　身のあきを思ひ乱るる花の上の露の心は言へばさらなり

など言ひて、例のつれなうなりぬ。　（蜻蛉日記・上・一一一）

これは天徳元年七月、兼家と共臥ししている折のことで、互いに不満があったのか、兼家が道綱母を花に喩え、その色が乱れているのは白露が置いたせいだろうかといいかけている。筆者が涙をためていたのだろうか。思い乱れている様子が顔に出ているが、それは私に心を隔(お)いているからだろうか、打ち明けてほしいといわれた筆者は、あなたに飽きられた身のつらさで思い乱れているのが見てとれたのなら、まして心の中はいわずとも明らかでしょうにと返して、「例の」よそよそしくなってしまった。そのためか、早くに出て行こうとする兼家と綱の引き合いのような贈答の後、結局兼家は留まる。この場面を特徴づけるのは、まず、「臥しながら」と共臥しの状態でと断るところにある。そこから具体的な語らいの経緯が描出され、二人の感情の経緯が和歌で語られていく。ここに、共臥しするか否かという初期物語の外面からの記述では描出し得ない、男女の語らいが臨場感を持って細やかに示されていく。

　康保三年三月、筆者宅で兼家が急に苦しみ出して、苦痛をおして帰ろうする際、こんな状態で辞去するのを詫び、泣く筆者を慰め、もう再会できないかもしれない、「『かくて死なば、これこそは見たてまつるべき限りなめれ』など臥しながらいみじう語らひて泣く」（上一四〇）姿、女房たちにまで「ここにはいかで思ひきこえたるとか見る」と筆者への愛をひたすら語る姿が、事細かに紙幅を費やして綴られていく場面も、筆者としてはぜひとも書きとどめておきたい、兼家の愛情だったろう。それを可能としているのが「臥しながら」という、新たな表現である。

②心地も苦しければ、几帳さし隔ててうち臥すところに、ここにある人ひやうと寄り来て言ふ、「撫子の種取らむとしはべりしかど、根もなくなりにけり。呉竹も一筋倒れてはべりし。つくろはせしかど」など言ふ。…いらへもせで、あなもの苦ほし、いとたとしへなきさまにもあべかなるかなと思ひ臥して、さらに動くまじければ、

（蜻蛉日記・中・二五二）

②は一ヶ月に及ぶ鳴滝参籠から兼家に強引に京に連れ戻された夜のことで、筆者は「几帳さし隔ててうち臥」している。それは疲れが出たので兼家に失礼にならぬよう几帳を立てて病臥した体だが、その実、決まり悪くて兼家との間に几帳を立て、応対などしないと拗ねているにほかならない。そこへ留守居の者が撫子の種や呉竹の報告を始めたので、兼家に茶化される事態となり、筆者もおかしかったが「つゆばかり笑ふ気色も見せず」、方塞がりとなった兼家に一緒に方違えしないかと誘われても返事もしないで、「思ひ臥して」横になったままで動こうとしないでいたと記す。蜻蛉日記には「思ひ臥す」が三例、「臥して思ふ」一例が見え、兼家との仲をあれこれと思う、もの思いの「臥す」が目に付くが、それらとは別に、こうした 活き活きとした明るくもある夫婦生活も綴られていて、まことに印象深い。

六　落窪物語１

落窪物語では他の物語に比して「臥す」が多用されていると述べたが、巻一に五二例、巻二に三四例、巻三に四例、巻四に三例と、巻によって偏りがあり、巻一と巻二に多用されている。この物語には蔵人少将道頼（以後、「男君」と記す）と落窪の女君、それぞれに仕える帯刀とあこぎ、継母が女君を与えようとした典薬助、男君の復讐で入れ替わった面白駒と四君の四組の男女の関わりが語られる。これら四組の男女の情交が巻一と巻二で語られており、そこに「臥す」が多用されているのである。

男君と女君の交情と幸いは帯刀とあこぎのそれと連動して語られる。

①二人臥して、かたみに君の御心ばへなどを語る。今宵雨降れば、よもおはせじとて、うちたゆみて臥したり。（落窪物語・一・三四）

まず、帯刀があこぎに文を贈って結ばれ、その寝物語の中で互いの主人について語りあうという、仕える者たちの世界が描出され、続いて、男君が女君に興味を持って文を贈る経緯が綴られていく。①は男君を手引きすることになった帯刀が、雨降りなのでいらっしゃるまいと油断して、あこぎを呼び出し、仲良く共臥しをしているところである。と、そこへ予期に反して男君が現れたので、帯刀は、再び女君の御前に戻ったあこぎと女君を格子のはさまから垣間見させ、男君の命であこぎを女君から遠ざけ「率て行きて臥しぬ。物も言はで、寝入りたるさまをつくりて臥」（三八）して、あこぎが侵入に気づいても「『何わざかせむ。寝なむ』と抱きて臥したれば」（三九）と、抱き込めて行かせない。

②少将捕らへながら、装束解きて臥したまひぬ。…衣どものいとあやしう袴のいとわろびすぎたるも思ふに、ただ今死ぬるものにもがなと泣くさま、いといみじげなる気色なれば、わづらはしくおぼえて、ものも言はで臥いたり。（一・三九）

一方、男君は女君を捕らえて装束を脱いで臥し、満足な衣装もつけていない女君が恥ずかしさに動転して泣くなか、何もいわないで行為に及ぶ。「ものも言はで」と語るのは「言ふ」のが常のようで、この後男君も、侵入という無体な行為に及んだのは一度も返事をくださらないからだ、こうなるのも宿世だったと思っていますと「語らせたてまつりて、臥したまへれば、女、死ぬべき心地したまふ」と、いいわけし、なだめ、想いを語って共臥しするのだが、ひたすら恥を思う女君には届かない。

このように、この物語では男君と女君の情交を「臥す」で表現しているのだが、述べたように「臥す」自体は横たわる動作を表すだけでしかない。それは「寝」であっても同じだが、その「寝」も古事記では「二人」「率寝」「さ寝」「争はず寝」「御宿」「一夜御寝」という表現があって情交と知られる。〈注2〉平安和歌や仮名文でもこうした語が加えられたり、男が「行く」などと述べて情交を表現している。「臥す」も同様で、①②からはそうした情交を表す「臥す」表現が明らかである。それは大別して次の三種の表現をとる。

イ　「二人」「二所」「君と」など、「臥す」当人や相手を明示する

ロ「装束解きて」「抱きて」「率て行きて」など、動作を明示する

ハ「語らせたてまつりて」「ものも言はで」など、話しかけを明示する

で、これらは和歌にも物語にも認められる、情交の「臥す」表現である。

一方、女君の衝撃もまた、「臥す」で語られている。

③返り事書くべくもおぼえねば、ただ衣をひき被きて臥したり。（一・四八）

後朝の文が届いても女君は「心地悪し」と返事もしない。さらに昼間に男君の文が届いても返事を書く気になれず「衣をひき被きて臥し」ている。女君のコミュニケーション拒否である。それはずっと続いていて、男君を迎えるためにあこぎが調度や衣装を手配し、女君の髪を繕おうと

しても「『心地悪し』とて、ただ臥しに臥し」（四九）ていた。けれども、男君が訪れると「臥し」ているのは失礼だと起きようとする。それを男君は具合が悪いのならそのままでと語りかけて「臥したまひぬ」。

④今宵は、袴もいと香ばし、袴も衣も単もあれば、例の人心地したまひて、男もつつましからず臥したまひぬ。今宵は時々御いらへしたまふ。（一・五二）

この日は、女君は装束も整い、人心地が着いて、それを敏感に察した男君も「つつましからず臥」す。女君は食事も出せない恥に「わりなう苦し」と「臥し」もするがあこぎに助けられ、三日の夜、大雨にもかかわらず訪れた男君の愛を信じるようになる。夜が明けても男君は帰り憂くて「臥し」続け、「昼まで二所臥いたまへる」と互いに心を許して愛し合うさまが呈示される。以後、二人の愛は、男君の訪れるさま、女君が継母の讒言によって折檻で物置に閉じ籠められ、典薬助に与えられる危機をどうにか乗り越え、助け出されて二条の邸に据えられた時、面白駒を使って継母に仕返しをした時、といったふうに、二人の仲が、要所々々での女君との共臥しで語られていく。二人の愛の経緯と幸福が情交を表す「臥す」表現で語られているといえよう。

⑤翁、装束解きて臥して、かき寄すれば、女、「あが君、かくなしたまひそ。いみじき痛きほどは起きて押さへたるなむ少し休まる心地する。後を思さば今宵はただ臥したまへれ」と言ふ。いとわびしくていたう病む。あこぎ「今宵ばかりにてこそあれ。御忌日なれば、なほただ臥したまへれ」と言へばさもあることとや思ひけむ、「さらばこれに寄りかかりたまへ」とて、前に寄り臥せば、詫び詫びおしかかりて泣きゐたり。（二・一二六）

その典薬助が女君に迫る場面はどうか。典薬助は「装束解きて臥して、かき寄す」。これは情交を表す「臥す」表現のロで、②で男君が押し入ったときも「装束解きて臥したまひぬ」であった。まさに女君の危機である。女君はこれより前、継母が典薬助を引き入れた時に胸が痛いと温石を頼んだのだが、温石を渡されてもまだ胸が痛むから「今宵はただ臥したまへれ」と哀訴し、あこぎも忌日だから「ただ臥したまへれ」といい添えたので、典薬助は女君の「前に寄り臥」すにとどめ、危機を逃れたという。しかし、「装束解き」「かき寄す」行為はいうまでもなく、老齢の好色な典薬助に「寄り臥」させられることなど、気味悪いばかりであったろう。女君はいやいや寄りかかって泣くほかなかったのである。典薬助との一夜目は、情交表現の「臥す」ロを巧みに用いることで、危機感を煽っている。この窮地を危機一髪で逃れた女君は、翌晩はあこぎの機転で典薬助を閉め出し、お腹を下させて撃退するという滑稽な一幕として終わり、女君は男君に助け出される。

では、面白駒と四君はどうか。

⑥北の方聞きて、さらにものもおぼえず、あきれ惑ふ。おとどは、「老いの上に、いみじき恥見つる世かな」と爪弾きをし、入りて居たまへり。四君は帳の内に据ゑたりけるに、ふと入り来て臥しにければ、え逃げず。…誰も誰も嘆き明かすに、四日よりは泊まると言ひしと思ひて、無期に臥せり。（二・一六一）

男君が許し難く思った継母の虐待、その一つが女君を典薬助に与えようとしたことで、男君はその仕返しに、四君に婿取られると見せかけて、面白駒とあだ名され嘲笑されている従兄弟を身代わりにする。そんなこととはつゆ知らぬ中納言家の人々は、継母も女房たちもよい婿を取ったと喜び、四君も「かかる痴れ者とも知らで臥し」（二・一五五）て結ばれ、後朝の歌に不審を抱きつつも露顕の日を迎えた。そこに現れたのが面白駒であった。しかも、四君には男君より前から通っていると主張する。継母も父中納言も呆れてその場から去るなか、面白駒は四君の御帳台に

「ふと入り来て臥し」、あまつさえ、婚姻が成った翌朝からは際限なく共臥しして起きてこない。以後も「いつとなく臥し」（一六三）「ものも言はで臥しぬ」（一六四）と面白駒の野放図な好色さが迷惑なものとして描かれていく。

このように、落窪物語で情交の「臥す」表現は、男君と女君に二三例、帯刀とあこぎに六例、面白駒と四君に五例認められる。こうした情交の「臥す」表現は、男君と女君の愛の始発とその経緯、主人たちの幸福に関わる、仕える者たちの活躍と成果、女君の危機の描出、男君の仕返しを効果的に語る面白駒の飽くなき好色を描出するがために、初期物語とは一転して、散文に多く用いられたとおぼしい。

七　落窪物語２

落窪物語で顕著なのは共臥しだけではない。「臥し」た状態で物事を見聞きし、思案し、もの思いをする状況が語られている。男君は几帳の内に「臥して」継母の姿を垣間見、鏡筥の詐取、憎まれ口や差別的ないようをつぶさに見聞きして怒り、女君をいたわしく思い、少納言の君が語る交野の少将には対抗心を燃やしている。

その継母もまた、「臥し」て思案している。

①北の方聞きはてて、いとねたしと思ふ。「例の腹立てよ」と言ひつるは、さきざき我が腹立つを聞きたるにやあらむ、語りにけるにやあらむと、いとねたし。つくづく臥して思ふに、ゆき方なければ、なほおとどに申してましと思へど、容貌はよし、さきざき直衣など見るに、よき人ならばもて出でやしたまはむと危くて、なほ「帯刀にあひたる」と言ひなして、…」　（一・九七）

女君に通う男君を垣間見した継母は「つくづく臥して」、自慢の婿の蔵人少将に優る男君に衝撃を受け、立腹しがちだとからかわれたのもしゃくにさわり、どうしてやろうかと考えるが、良い方法を思いつかない。夫に告げようかと思うけれど、容貌や直衣からは身分が高い人のようだから、夫が結婚を認めるかもしれない、と葛藤し、やはり従者の帯刀と契っているといいつけようと結論する。ここから、女君の閉じ籠め、男君の救出と仕返し、女君の据え婚から正妻へと、物語が大きく動いていくのだが、ここで注意したいのは、継母でも「臥して思ふ」ことである。四で述べたように、「臥す」には横たわってもの思いをするという用法があって主人公たる男女の姿として語られる。にもかかわらず、いわば敵役の継母が「臥して」事態に葛藤し、あれこれと思案するのは、単なる継子いじめの性ない継母というだけではなく、当時の日常でもあったろうが、人間的な造型がなされていると考えることもできよう。

②二条には大殿油参りて、少将の君臥したまひて、あこぎに、「日ごろのことよく語れ。ここには、さらにのたまはず」とのたまへば、あこぎ、北の方の心をありのままに言へば、君あさましかりけることかなと思し臥したまへり。「人少なにて、いと悪しかめり。あこぎ、人求めよ。殿なる人々にも聞こえむと思へども、ゆかしげなき。あこぎ、大人になりね。いと心およずけためり」と言ひ臥したまへれば、　（二・一四二）

二条の邸に女君と落ち着いた男君が「臥し」たままであこぎに、ここ数日の経緯を語れと促し、あこぎが継母の意図をありのままに話す。次いで、あこぎに女房を集めて、おまえはその中で大人となって女君に仕えよと命じている。ここでは「臥したまひて」「思し臥したまへり」「言ひ臥したまへれば」と、「臥す」が三度使われて、男君が横になったままで、あこぎに報告させ、命じている。中納言の三条邸完成の折も「男君の臥したまへるほどに」御帳台の内にいる男君に報告している。こうした主従の描出も、臥して思案し、眺め、決定するのが日常であったと

知られよう。

八　うつほ物語

紙幅のゆとりがないので、簡略に述べると、うつほ物語の「臥す」で興味深いのは、男女の仲の描出である。

①居暮らして、夜もこなたに寝なむとすれば、母「などかあなたには参うでたまはぬ、ここには殿籠る。あなさがな。人は心置きて思さずや。…されど夜を重ね日を積みて、この年ごろここに通ひたまふは、いかに面立たしきことなり。…あが仏、おろかに、この君に思されたまふな」と泣く泣くのたまへば、…「いさや、何ごとを人か言ひけむ。この賭弓の饗より帰り来にしままに、起き臥し静心なく思ひ焦らるることのあめれば、おのれが見まうく見苦しきを思ふにやあらむと思へば、見えじとてなむ」。…少将臥いたり。女来たれば、「などか今まではおはせざりつる」と言へば、女、「いさや、思ひ静まりたまふやとて」。少将、「ましておはせぬぞ苦しき。早うおはせよ」と言ひ臥せり。（うつほ物語・嵯峨院・二六二）

ここでは忠保女が、夫仲頼が帰っているにもかかわらず、親の部屋に居続けて、夜も泊まろうとするのを、母に説諭されている。忠安女は夫が正頼邸の賭弓の饗から帰宅して以来、常時「頭ももたげで思ひ臥せる」のがいぶかしく、もしかすると私を醜女とみて心が離れたのではないかと危惧し、会うまいとしたと訴える。妻の勘というべきだが、実は仲頼は正頼邸で光り輝く天女のようなあて宮を垣間見て、魂を取られて呆然とし、片時も離れられぬほど熱愛した忠安女も目に入らず、恋に病み臥していたのである。夫婦の危機である。しかし仲頼は、母に諭されてやってきた妻に「早うおはせよ」と誘って「臥」す。しばしは反省して妻を哀れに思い「もろともに臥し」た仲頼だが、恋煩いで「病につき臥し沈」むままで、破局の日は近い。それはまた、実忠も同様であった。

①では共臥しを躊躇する妻の側から不安が語られているのだが、男性から妻への情熱が語られるのが「入り臥し」である。

②中納言、御帳の内へ入りたまへば、尚侍のおとど「あなさがな。あらはなるに」とのたまへば、「何か。かかる宮仕へ仕うまつる人には、内外をこそ許したまはめ」とてつつみきこえたまはねば、…中納言「久しくいも寝はべらねば、乱り心地いと悪しうはべる。罪許したまへ」とて、宮の御傍らにうち臥したまひぬ。（蔵開上・三四七）

女一宮のいぬ宮出産は琴の技を継ぐ者の誕生で仲忠にとって慶事であった。お湯殿の儀が無事終わると、俊蔭女がいぬ宮を抱いて御帳台の中に入って女一宮のもとに寝かせた。すると仲忠が御帳台の中に入りこんで、母の叱責にも遠慮せず、妻の傍に横になってしまう。俊蔭女が「うたて。もの覚えぬさましたまふめり。さて忍びて候ひたまへ」と咎めても「衾引き着て」「かかるもの、またもがな。いととく」と同衾して、共寝しようとする。この件は産婦に「入り臥し」したと、以後繰り返し人々の話題となって広まり、二年後、男子が産まれた際もまた「入り臥し」、女一宮が洗髪して乾かしているさなかも、「かき抱き下ろして、率てたてまつりたまひて、やがて御帳の中に入り臥」（蔵開中四九一）すという行為で、妻への情熱が示されていく。仲忠はあて宮に恋文を贈っていたのに、女一宮を得てからは妻一筋に変わり、それを女一宮がうるさがるのを怨む姿が描出されていく。

こうした妻への情熱が端的に語られるのが「入り臥し」で、仲忠に六例認められる。

③宮は、昼よりさる気色御覧じて、「あやしく、心地の悪しきかな」とて、捕らへて臥したまひぬるままに、起き居たまはず。おとど参

りたまへれば、宮入り臥したまへれば、え上りたまはで、下に立ちたまへれば、君達はさながら土に立ちたまへり。（蔵開下・五五八）

春宮にもあて宮への「入り臥し」が三例認められる。③では正頼があて宮を退出させようとして一門総出で供奉しようと参内する。春宮はその気配を察して、気分が悪いとあて宮を捕らえて横になったまま起きず、あて宮の御帳台に入って横になっておられるので、正頼は簀子に上ることも出来ず、階の下で立ち、子息たちは地面に立ったまま待つしかない。春宮は「夜更けぬ」と申し上げてもかまわず「つと抱きて臥し」、仲忠と結婚できなかったのを悔しく思っているのだろうと嫉妬もあらわにあて宮をさいなみ続け、遂に正頼を退け、退出させてしまう。国譲上巻で、あて宮が服喪のため退出する際も、春宮は止めこそしないが、当日は「入り臥し」て迎えが来ても許さず、暁まで放さない。あて宮への常軌を逸した執着というほかないのだが、こうした情熱が「入り臥す」三例で繰り返し語られていく。

思えば、うつほ物語では、あて宮が入内した後の求婚者たちの、諦めきれず身を損なうほどの恋着と、その対極にある仲忠の婚姻した妻への情熱、春宮のあて宮への執着、これらは、兼雅の俊蔭女に対する、大臣ら貴顕の正頼の娘たちに対する恋着も相似たものといえる。妻たちがむしろ夫に対して冷静にふるまっていることを思えば、うつほ物語は主として男の恋情を語っているといえよう。①の忠安女はむしろ特異で、身分的な相違が造型に関係しているのかもしれない。

九　終わりに

こうしてみてくると、男女の共臥しをいう「臥す」表現は、愛の経緯から夫婦の微妙な心理、力関係など、作品それぞれに異なる様相を浮かび上がらせている。ところが、源氏物語になると、同じ語を用いながら、それまでに認められない独自な用い方、まったく違った状況を創出していく。これについては別稿に譲りたい。最後に四と六で述べた、「臥す」の用法が、平安仮名文でどのように現れているかを表で示した。

表　平安仮名文の「臥す」

	共臥し					その他							
	歌	散文				和歌			散文				
		イ	ロ	ハ		b	c	d	a	b	c	d	
竹取物語									4				
伊勢物語										1	1	2	
大和物語	2		1				1	1		1	1		
平中物語						1							
蜻蛉日記	1					1			1	4	10		
落窪物語	1	3	15	13	6				6	12	33	2	2
うつほ物語	2	2	14	5	2	4	5		6	15	35	1	
枕草子		5							1	16	4		
和泉式部日記		2					1				7		
源氏物語													
紫式部日記										5			

イ人　ロ動詞　ハ　話しかけ
a病臥　b就寝　cもの思い　d常時

注

〈1〉三代集は新編国歌大観、その他は新編日本古典文学全集を用いた。引用文も同じ。わたくしに表記などを変えたところがある。引用文には括弧中に、作品名・巻名や段数・頁数を示した。取り上げるのがその作品だと明らかな場合は作品名を省略した。

〈2〉拙論「古事記の『婚』―男女の関係表現から―」（「梅花女子大文化表現学部紀要」第一三号二〇一七年三月）